

「梅花、雪に耐えて花開く」の言葉のとおり、先週から咲き始めた白梅がこの雪に耐えて花開いております。

本日はご多忙にもかかわらず、多賀城市長 菊地健次郎様をはじめ、多くのご来賓の皆さま並びに保護者の皆さまのご臨席をいただき、第三十八回卒業式を盛大に挙行できますことを大変嬉しく思います。本校を代表して、三年間の高校生活を支えてくださった皆さまに心より感謝申し上げます。

そして、校歌に歌われる「紺碧の天翔けわたる鵬」のように、いままさに笠神の丘の辺から羽ばたこうとする二七九名の卒業生の皆さん、卒業おめでとう。また、いつも温かく見守り、共に歩みながら育ててこられた保護者の皆様、お子さまのご卒業誠におめでとうございます。

卒業生の三年間は、「さとく、ゆたかに、たくましく」の教育目標のもとで、震災復興の困難を乗り越えながら文武両立を目指した三年間でした。学習活動では師弟同行で授業第一を実践し、部活動では水泳飛び込み競技三年連続インターハイ出場に代表される活躍があります。文化部では、放送部のNHK全国高校放送コンテストへの出場や吹奏楽部の東北大会金賞など、運動部では、弓道部の全国選抜大会出場や山岳部の東北大会出場など大活躍でした。また、多高三大行事は卒業生が牽引役となって充実し、創立四〇周年記念式典も見事でした。加えて、津波標識設置活動に代表されるボランティア活動について、昨年三月に開催された国連防災世界会議のフォーラムで世界に発信することができたのも卒業生の活躍の賜です。

さて、卒業生はこれからそれぞれの道を歩み始めますが、皆さんを取り巻く社会環境や経済状況は厳しく、まさに「波濤さかまく大洋」に漕ぎ出すこととなります。そこで、卒業の饞に皆さんを激励する話をします。以前取り上げた法政大学の坂本光司先生の著書「日本でいちばん大切にしたい会社」の最初にある「日本理化学工業株式会社」の大山会長の話です。神奈川県にあるこの会社は教室で使うチョークを製造しています。五〇年前に知的障害をもつ二人の少女を採用して以来、現在では障害者雇用率が七割に及びます。

採用を担当していた大山さんは、五〇年前、今の特別支援学校にあたる養護学校の先生から二人の女子生徒の採用を依頼されました。しかし、チームでの仕事が多いことを理由に断りましたが、何度も足を運ぶ先生の熱心さから、一週間だけという条件で就業体験を引き受けました。毎日、二人の生徒は午前八時から午後五時までどんな天候の日もやってきて、コツコツ仕事をしたそうです。保護者や依頼した先生も一緒に来て遠くから見守っていたそうです。約束の一週間が終わ

るとき、当時十数人の社員全員が二人を正社員として採用して欲しいと大山さんに訴えました。「もし、二人にできないことがあるなら、自分たちが全員でカバーするのでどうか採用してください。」と話したそうです。その思いを受け入れ、大山さんは二人を採用しました。

それ以来、少しずつ障害者を採用するようになったのですが、当時の大山さんは、障害者が一生懸命働く姿を見ながらも、会社で難しい仕事をするよりも施設でのんびり暮した方が幸せなのではないか、と考えていました。ある日、禅宗の僧侶にその疑問を尋ねたところ、そのお坊さんは次のように答えたそうです。

「幸福とは、人に愛されること、人に褒められること、人の役に立つこと、そして人に必要とされることです。そのうちの人に褒められること、人の役にたつこと、そして人に必要とされることは、養護施設では得られないでしょう。この三つの幸福は、働くことによつて得られるのです。」と。

大山さんはそこで気づきました。「人間にとつて『生きる』というのは、必要とされて働き、それによつて自分で稼いで自立することなんだ」と。そして「そういう場を提供することこそ、会社にできること」であり「企業の存在価値であり社会的使命なのではないか」と思い、それ以来積極的に障害者を雇用し続けているそうです。

繰り返し返します。幸福とは、人に愛されること、褒められること、役に立つこと、人に必要とされること、そして、愛されること以外は働くことで得られる、ということです。

皆さんはこれから自分の足で社会に出て行きます。厳しい現実が待っているかもしれませんが、どんな逆境もすべて自分の人生です。「禍福はあざなえる縄なり」とも言います。辛いと思う場面でも実は生かされています。感謝の心を忘れずそれぞれの人生の中で主人公になれるよう自立して生きて行ってください。

最後になりますが、校歌一番にあるように「永遠の真理を求めゆく」人となるよう期待し、卒業生の前途洋洋たることを心から願って式辞とします。

平成二十八年三月一日

宮城県多賀城高等学校長 小泉 博